

愛知民家 ・建築生活・

加藤家住宅 加藤惣一



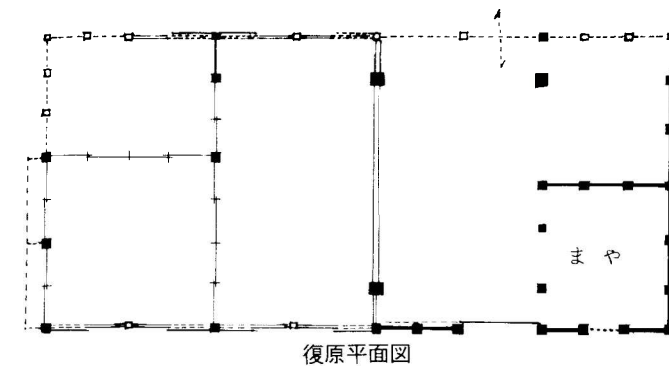
所在：愛知郡長久手町岩作字石田4番地
形式：入母屋平入、茅葺鉄板葺、鳥居建、農家
規模：桁行8間・梁間4間半
年代：当初18世紀中期、明治24年瀬戸市品野から移築

加藤家は、長湫古戦場から北に4kmの長久手町の中心地に近い位置にある。代々農業を営んでいるが、明治24年の濃尾大震災によって旧宅が倒壊し、現在地から北11kmの瀬戸市品野（旧品野村）の農家を移築して今日にいたっている。尾張地方の農家は江戸時代いらい、鳥居建形式の構えであったから、いずれの地域に移築しても住生活に変化をきたすことはなかった。

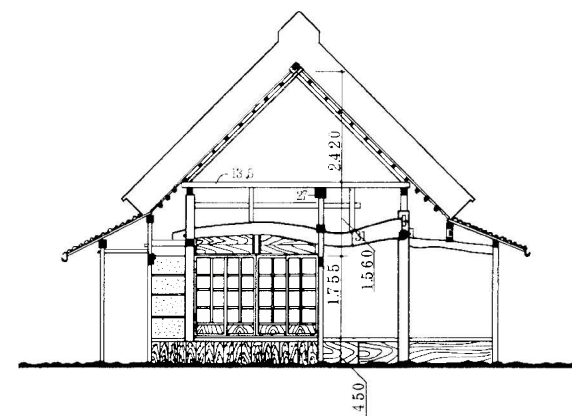
現状の間取図に示すように、広い「にわ」と「四間取り」の居室が明治24年の移築時に生れた間取りである。移築前の構えは、間取りや規模が現状とかなり異っていた。復元間取りのように『^{ひろま}三間取り』の構えとなり、規模も桁行が半間、梁間は1間と現状より小さいことが分かる。炊事場や風呂場が増設されたのは昭和戦後のことである。現状間取りの特徴は、「まや」を当初のままにして、これに床を張って部屋としている。居室を四間取りに改め、「ざしき」に仏壇・^{そでかべ}とを付け、「なんど」に押入れを採用している。柱間装置では、入口の大戸や「だいどこ・ざしき・かつて」の外側に土や板の袖壁が残り、余分な柱を除去しながら江戸時代形式の袖壁をみることができる。また、正面に^{かわらびきし}瓦^{まこげ}庇の孫下屋をつけ、土庇として使用する古い形態を知ることができる。

架構造は鳥居建形式であって、古い架構の骨組み（軸組）が残り、新しい間取りに対応した架

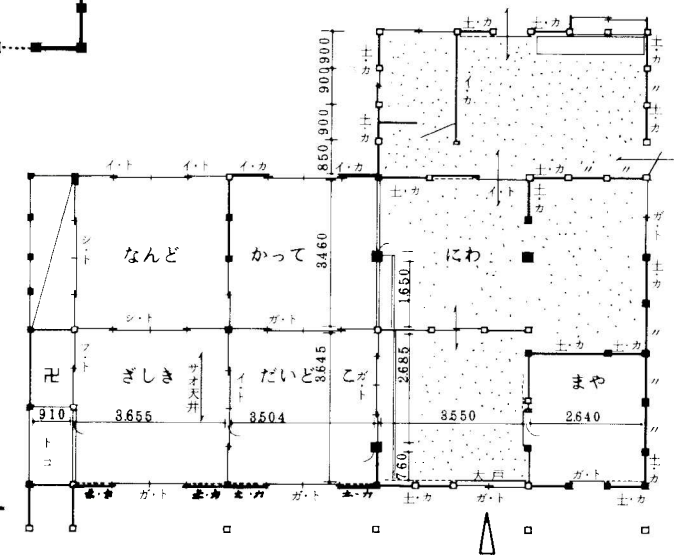
30 構への過程を知ることのできる貴重な農家である。



復元平面図



居室とにわ境断面図



現状平面図



だいどこ・にわ境



かつて・にわ境

「にわ」中央の仕切りは、明治の移築時に付設して前後に区切りしている。また、「だいどこ」と「にわ」境も開放から建具を入れて部屋としている。

「にわ」と「かつて」境は、当初の開放のままで、下屋を1間に拡張して中央に当初の上屋柱を残したままになっている。

編集後記

長年の調査・記録をまとめて、単に写真集ぐらいの軽い考えで出発したのであるが、いざ、一冊にまとめて出版するとなると、実に多くの問題に直面し、作業は甚だ難渋して進展せず、本当に出版できるかと途中で挫折寸前にまでになりました。

当初は愛知建築士会創立30周年記念として、昭和57年7月に発刊する予定でありましたが、心ならずも今日まで延引してしまいました。また、建築士会員をはじめ多くの皆様から出版について知言を頂戴しました。委員会一同、心から深謝申し上げる次第です。

調査や記録をまとめるにあたって、市町村の各機関・民家所有者・居住者の絶大なる理解とご協力をいただきました。その他多くの皆様にご指導とお力添えをいただき、心から深謝申し上げます。

なお、本集録の民家は、その多くは現在なお生活の場であって、居住者の生活環境を大切にしてほしいものです。特に写真や見学については、必ず許可を得るようにお願いします。

調査、記録に関係した歴代担当理事、委員長及び委員構成

担当理事	委員長	委員	解説主査	協力者
五十嵐 昇	榎原 敏彦	榎原 敏彦	川村 力男	名城大学建築史研究室
佐久間達二	中井 照博	佐藤佐太郎		昭和41年以降歴代学生
岩城 誠作	眞野 純夫	中井 照博		諸君
安井 辰夫	安井 辰夫	税田 公道		
中島 一	加藤 鉦一	伊藤 栄蔵		
宮崎 辰敬		五十嵐 昇		
		岩城 誠作		
		加藤 鉦一		
		川村 力男		
		安井 辰夫		
		丸藻 伸一		
		佐久間達二		
		伊藤 正蔵		

愛知の民家

昭和59年4月

定価5,800円

編集者 愛知建築士会民家調査特別委員会

発行者 社団法人 愛 知 建 築 士 会
名古屋市中区栄4丁目3番26号
TEL 052-261-1451(代)

制作 丸善(株)名古屋支店

出版サービスセンター
名古屋市中区栄3丁目2番7号
TEL 052-261-2251(代)